

建前と本音

（誤解を承知で書きます。誰しも自分の家族が元気で家にいるのを喜ぶのは当然である。それでも）

大阪府の医療監のなにがし氏（名前を忘れてしまったが、府庁の人に尋ねると、まだ50代の若い人らしい）が、新型コロナの新しい患者が重症になったら、なるべく若い人を優先しろ、という指示をだした。府知事は、「府の方針と異なる」、とって撤回させたという記事が掲載された。現場において同じことが知事は言えるのか？

知事の話は、「建前」であり、医療監の話は「本音」だろう。医者もそうだろうが、周りのスタッフにしてみても、やっぱり元気に退院していくのをみたいものである。高齢者であればあるほど、退院が難しく、入院期間が長くなる。たとえば、医療スタッフにしてみても、試行錯誤の連続であっても、モチベーションを保つのがきつくなる。しかも体力的にも徹夜の勤務が連続する。・・・「使命感」がないとやられてはならない。

ワクチンの順番といい、入院の順番と言い、いずれも医療監氏の主張する通りだと思う。たしかに高齢者に重症が多いのは認めるが、一概に「年齢」で区切るのも問題ありと思う。TVは、建前だけでも辻褄を合わせようとするから、「100歳が退院」と書く。100歳で退院してそれから何をするの？ 一方で40台、50台の働き盛りの人が入院できずに亡くなっていることを書かない。残された家族の生活をどうするのか？ 社会全体の利益を考えたとき、家族はともかく、40歳の人で亡くなったら、惜しい人を亡くした、という。100歳の人なら、「歳に不足はないが」というだろう。・・・新型コロナ肺炎は、今までに経験したことのない、どの薬剤が有効なのか、あるいは有効な薬剤があるものなのか、手探りの状況である。あまり高齢であれば、投与した薬剤によるものの可能性も考えなくてはならない。

歳月というのは、冷酷なものである。馘をかけて（あるいは、つい本音がでたというべきか）指示を出しただろう医療監に、ここは賛成するものである。知事といっても、国に緊急事態宣言をださせて、コロナを蔓延させる飲食を提供する場をなくせ、と言う単純なことの繰り返しである。では店の立場や酒屋さんの立場で物事を考えるとき、「本当の意味での」対応に適っているのだろうか？ 経済とまでいわなくても、日々の生活に支障をきたすのは、どうだろう？ 一体何軒の飲食店や酒屋、八百屋、魚屋、

果物屋が倒産の危機にあると思っているのだろう。

大阪のある病院で、70歳以上の患者をうけいれたくない、と泣きながら訴える看護婦がいる。まだ若いし、体力的にもこらえることができるが、交代のメンバーが来てくれても、細かい部品などがどこにあるかわからない。従来なら掃除などは、それ専門にしてくれている人がいるが、コロナでは、ワクチンを打ってからでないと依頼できない。結局は、連日深夜の勤務と本来の仕事以外のことまで自分たちがしなければならない。このとき、強い使命感がなければ職場にでていくのがつらくなる。

帰宅の時にも、不要不急の外出でキャアキャアと騒ぐのがいるのだが、彼らがコロナに感染しても、自業自得でしょ、という反応しかできない。……ぼくは、よくやっている、あるいは頑張っている、としか褒めようがない。

わずか150年余りのうちに、ここまで進歩してきた、と感嘆するのみである。(現在は、男性の看護師もふえたけれども、彼らにしかできないことも多々ある。) 日本における看護の歴史は、始まりは家族による本能的な看護である。これは万国共通である。組織的には聖徳太子が、貧困病者の救済に当たり、また光明皇后が多くの老病人に尽くしたことが有名である。

看護婦が職業として出発したのは、明治時代になってからである。この職業の発展は、戦争と結びついている。はじめは東北地方での、会津、長岡など東軍の抵抗で負傷した西軍(官軍)の兵士らが対象である。戦争による負傷のため興奮しており、医者や男の看護人汚いうことをきかない。そこで女性の力に頼ったが、バクレン女と呼ばれたような人々が最初である。

明治20年ごろから本格的な教育がはじまり、歌もできて、その後ようやく良家の子女がこの職業につくようになったのである。ナイチンゲールに遅れること30年余りのことである。(看護婦については改めて書く。)